

ムチムチ無防備な友達にわからせラブ  
ハメックスして俺にしか見せられない  
ドスケベボディに仕立て上げる話♡

DLsite : [https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=maker\\_id/RG01054027.html](https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=maker_id/RG01054027.html)

Pixiv : <https://www.pixiv.net/users/118815944>

## 注意

- ・ この作品はフィクションです。
- ・ まんこやちんぽといったモ口語を使っています。

攻め 大宮

176cm 大学3年生

結城の友達。オタク。

受け 結城

185cm 大学3年生

大宮の友達。

イケメンで褐色ムチムチボディでちょっとおバカさん。

ピンポン

「ばんわー！大宮、来たよ♡」

友人の結城がいつものように俺ん家に泊まりに来た。  
甘いマスクを携え180を超える巨体は、お菓子の入ったコンビニの袋をガサガサと揺らし慣れた様子で中へ上がり込む。

結城との付き合いもかれこれ10年くらいになる。  
小学生の頃から遊ぶ仲で、漫画やおもちゃをたくさん持っていた俺の家にこいつがくることが多かった。  
大学生になった今でもそれは続いている。  
結城は今時スマホで読みゃいい漫画もわざわざ俺の家まで来て読み漁っていく。

「俺の読みたい漫画配信してない。してても有料。でも大宮は持ってる。おーけー？」とのこと。  
まあ、趣味は不思議と合うし今期アニメの感想言い合えるし、俺としても楽しいんだけど……。  
他に友達いないのかと聞いこともあったが、「いっぱいいるけど……やっぱ大宮が落ち着くんだよね！オタクは大宮しかいないし！」と返ってきた。なんだよそれ。

「Abemaなんも入ってねーなー異世界転生ばっかじゃん」

もう2、3周はしたかと思うアニメたちを前に結城は愚痴をこぼす。

横に座った俺は番組表と一緒に見るふりをしながら結城の体を盗み見した。

元野球少年の肉体は凄まじく、腹筋は見事に割れ、弾力に富んだ肌をしている。

小麦色に焼けた色は健康的で、きめの細やかな表面は思わずなぞりたくなる程だ。

曰く、野球は辞めたもののせっかくカッコ良く仕上がった身体を失うのは惜しいので、

頑張ってジムに通って維持しているんだと。

それにプラスで遠慮なくバクバク食べるので何というか…  
…全体的にむっちりしている。

「風呂入ってくる！」

結城はそう宣言して立ち上がると、すっかり家の住人みたいな態度で風呂場へ消えていった。

この歳まで一緒にいてくれる友人がいることには感謝も覚えている。

しかしひとつ、結城に関する長年の悩みがあった。

・  
・

「あがったよ！」

こいつ風呂後に裸で登場してくんだよ。  
昔っからそう。修学旅行の時もそのまま廊下へ出ようとして先生から怒られていた。  
マジで頭の中変わってないじゃん。

「バカ、お前服は着ろって！」

「あがったばっか暑いんだよ～」

股間はタオルを巻いているもののパンツすら履いていない。  
褐色の美ボディはほかほかと蒸気をまといながら冷蔵庫までペタペタ歩いていき、取り出したギルティ炭酸を満面の笑みで飲んでいた。

……大切な友達なのに、バカな友達なのに、毎度俺は猛烈にイライラしている。主に下腹部が。

そもそも下だけに限らず上も着ろよ。なんで胸筋ならOKみたいな顔して晒してんの。

デッカい胸がぷるんぷるん震えてたら誰でも目で追うワケ。  
ムチムチの巨体が動き回るたびに、脇や太ももの隙間からお前の匂いが香ってきてこっちは大変なワケ。

周りが自分のことどんな目で見てるかもわからないのか？

このやりとりももう何回目かわからない。注意して聞いた試しはない。

俺はまたも今夜、結城がぐーすか寝ている間に股間の怒張を鎮めるはめになるのだろう。

ため息を吐き、冷静になろうと努めた瞬間、棚の淵にひっかかったのか、結城の腰のタオルがはらりと床に落ちた。

「あ」

「あ」

ぶるんっ、と結城のモノがあらわになる。

肌よりやや濃い色をしたそのデカめのブツは整った形をしており、端正な顔面、鍛え上げられた筋肉に合わさって色気溢るる完璧な肉体が完成した。

突然の視覚の暴力に思わず釘つけになる。

「やん♡大宮君のえっちい♡」

そんな肉体の持ち主とは思えないほど、結城は猫撫で声を発しながら古い漫画の真似をするように腰をくねらせた。

ブツツツツン

俺の細い細い理性の糸がとうとうプチ切れる。

「……てめえふざけんなよ」

ガシッ！

「うえっ、大宮？どうしたんだよ」

「その通りだよ俺はお前のことエッチな目で見てたんだよ  
ッ！！」

「えッ！？」

動揺している結城にたたみかけるようにその肢体を床に押し倒した。

まだ暖かく、水滴が残っている太ももを割り開く。  
むわりと石鹸の匂いに混じって結城の匂いが鼻をかすめる。

「ねえっ、ちょっ、大宮！」

さすがに異常事態だと気付いたのか結城がじたばた暴れ始める。

が、この後に及んで本気で抵抗しないバカにつける薬はない。

俺は自分の中指と薬指に唾液をたっぷり垂らし、きゅん♡と締まった尻の窄まりに手を伸ばした。

「これが結城君のアナルですか〜……」

「は……っ！？♡　そこシャレになんね……っ！♡」

「……毎っ回毎っ回俺のこと振り回しやがって……もう我慢ならねえ今日こそ思い知ってもらうからな！！」

ぬるぬるになった指で入り口のヒダを広げ、そのままナカへとゆっくり沈めていった。

つぶつぶ……♡

「ひいっ♡」

にゅち……♡にゅち……♡

時間をかけて肉を押し広げ、入口から念入りに慣らしていく。

ときには指の先を曲げて鉤爪のようにひっかけてやると身体をびくびくと震わせた。

結城は声を我慢することに集中しているようで、ふっ♡ふっ♡と吐息を漏らす以外は存外大人しくしていた。

これ幸いと俺は開発を進めていく。

ナカは締まりが良くキツキツだったが、

だんだんと2本の指をスムーズに出し入れできるようになってきた。



ここらで唾液ローションを足し、もう少し奥の方へと指を進める。

ずっ……♡ずっ……♡と探っていくと、周りより膨らんだ肉壁に行き当たった。

目当ての箇所を見つけた。

俺は前のめりになり、体重もかけてそのスポットをぎゅう〜〜っ♡と圧迫した。

「おほおッ！？♡♡♡」

ビクンッ！と結城の全身が跳ねる。

口元を抑えていた腕が外れ、下品な声が漏れ出た。

褐色のおっぱいもぶるんっ♡と震え、びたん♡と着地すると同時に汗の飛沫をあげる。

「へあ……♡なに、いまの♡おおみやあ……♡」

「もう一回触ってほしいか？」

「え！……あ……♡えっと……♡」

この状況で素直に悩んでいる結城に口角が上がる。

1秒後、真っ赤な顔でコクリと頷いたので、もう一度全体重をかける勢いでしこりをぐっっっっちゅり♡潰してやった。

ダメ押しに力をかけたままカリカリ♡と引っ搔くと、結城

は腰を反らして聞いたことのないヨガリ声をあげる。

「オオッ！？♡♡♡おおホォ〜〜ッ！？♡♡♡」

確かスポーツをやっている奴は感度が良いと聞く。  
結城の場合は……いや、にしてもすごいな。天然淫乱だ。  
だが痛くしたらかわいそうだ。手マンはきっちり念入りに  
やらなくちゃな。

ぎゅううっ♡ぎゅうう〜っ♡グツチュウ〜っ♡♡  
カリカリカリカリッ♡♡ずりゅっ♡ずりゅっ♡ずりゅっ♡  
ずりゅっ♡  
にゅちっ♡にゅちっ♡にゅちっ♡にゅちっ♡ぐっつつち  
ゅ〜〜〜っっ♡♡♡♡

「んいっ♡はっ♡はっ♡ああっ♡そこっ♡そごっ♡も  
うやめ♡ばか、おおみやっ♡しつこい〜〜っ♡♡♡ンアあ  
ッ♡♡おれおかしくなってる♡♡♡なんかクるううっ  
っ♡♡♡♡」

ビクンビクン♡跳ねる身体を押さえつける。  
上下に跳ねるデカおっぱいが何度も視界に入ってくるので、  
その可愛らしい先端を口に含み一気に吸い上げた。  
ラストスパートだ。同時にGスポを容赦無くすり潰す。

ぢゅううううううーっ！♡♡♡

ぐりゅううううううううーっっ♡♡♡♡♡♡

「ゾおおおおおおお～ッ！！？？♡♡♡♡♡乳首らめっ  
♡♡なんかキちゃ♡♡あぁあ～～ッ♡♡♡♡♡♡♡♡」

びゅるるるーっ♡♡♡♡

びゅるっ♡びゅるっ♡

結城の大きなちんぽが大きく揺れて、白濁液を噴き出す。  
それは浅黒い腹筋の上にはたはたと降り注いだ。  
ちゅば♡と音を立てて乳首から口を離す。  
わずかなしょっぱさと甘い匂いにクラクラしてきた。

「は……ナカ痙攣すご……イケて良かった。気持ちよかった？」

「はひ……♡はひ……♡きもちよかった……♡」

「じゃあ指増やすから」

「ええ！！？？♡♡」

ずぶうっ♡♡♡

ぐちゅっ！♡ぐちゅっ！♡ぐちゅっ！♡ぐちゅっ！♡

ぐりゅうっ！♡ぐりゅうっ！♡ぐりゅうっ！♡ぐりゅうっ  
！♡

コリコリコリコリゴリュゴリュゴリュゴリュッ！♡♡♡♡

「〜〜ッ！！♡♡♡オオッ♡オッ♡オッ♡お〜〜ッ！？  
♡♡♡おおみゃ♡とまっへ♡おホオオ〜〜ッ♡♡♡」

ピンッピン♡に張り詰めた乳首に  
たまらなくなつて再びむしゃぶりつく。  
もしかしたら乳でも出るんじゃないかと考えながら夢中で  
吸った。

ぢゅう♡ぢゅう♡ぢゅう♡ぢゅう♡ぢゅう♡ぢゅう♡  
ちゅっ♡ちゅっ♡ちゅっ♡ちゅ〜〜〜っ♡♡♡♡

「らめっ♡らっめっ♡やらあ！♡もれる♡おーみゃ♡♡も  
れ♡〜〜〜〜〜オオオおおお〜〜〜〜ッ♡♡♡♡  
♡♡♡」

プシャアアアアッ！！♡♡♡♡♡

「潮まで吹くとかエロくなりすぎだろっ……！」

美丈夫はその美貌を汗と涙で歪め、息を整えるのに必死に  
なっていた。

散々俺によっていじめぬかれたまんこはひくひく♡と収縮

している。

ちんぽのイライラがピークに達した。

半ば衝動的に自身のベルトを引き抜いて邪魔な布も全部取り去った。

ビキッ………♡♡

自分でも引くくらい完勃ちしている。

バキバキにそそり立つ勃起ちんぽを目のあたりにし、さすがの結城も恥ずかしさに顔をワナワナ震わせていた。

「え、うそ、デッカア……♡俺の知ってる大宮の、そんなんじゃないかった……♡」

「お前で興奮してこうなったんだよ。責任とってほしいわ」

「せきにんって……」

「最後まですんだよ。子供じゃないんだからわかるだろ？」

「それってセックス……！？なんで、俺たち友達で……」

もう友達には戻れないんだよ結城。

意を決心して吐き出した。

「好きだよ結城。ずっと好きで、こういうことしたかった」

「へ……？」

「俺はお前のエロい身体もバカな中身も含めて好きだけどさ、多分身体目当てで結城のこと見てた奴いっぱいいるよ。なのにお前はそんなこと露にも思わず簡単に裸晒すし無防備だしさあ。忠告も聞かないからいずれ他の男にやられてたと思うんだわ。……そんなことになったらムカつくから、今、俺のものにする」

「バカって言うなよ！てか大宮、好きってお前……ほ、ほんとかよ……？♡」

反応すんのそこか？やっぱ本当に脳みそ小学生級だろ。

「じゃなきゃこんなおったててねーよ」

「う……そりゃそうか」

汗ばむ首筋に顔を寄せ、言い聞かせる。

「なあ……結城のナカ入りたい。ここで抵抗しなきゃマジで挿れるぞ」

「……ッ！♡」

あの結城が顔を伏せて考え込んだ。

何を色々考えているのか目をあっちこっち泳がせている。いつの間にか荒く乱れていた息を整えつつ返事を待った。しばしの沈黙の後、潤んだ瞳がこちらを見上げて言った。

「大宮なら……いい……♡」

思わずハッと笑いが漏れる。

張り詰めたちんぽの先をぐずぐずに溶けた穴にあてがった。

「嬉しいよ結城……♡」

しっとりとした腰を両手で掴み、ゆっくり腰を押し進めた。

ぐぷぷぷぷう〜〜〜っ♡♡♡♡♡♡

ぢゅぷぷぷっ♡♡♡♡♡♡

「ッオ〜〜〜〜〜ッ♡♡♡♡♡♡おおみやの♡♡入っ  
てきてりゅ〜〜〜……ッ♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

できるだけ丁寧にほぐした甲斐もあり痛くはなさそうだ。  
処女だから狭いけれど、それもまた本当に結城と一緒にな  
っている感じがして幸せだった。

「フーッ♡フーッ♡あー……やべえ………好きだ結城…  
…きもちい……♡♡」

「ッ！♡」

「ずっときゅうきゅう抱きついてくるみたいでかわいいよ  
結城♡」

「やっ、やめろよ恥ずかしい……♡」

「って言われても、なんか言っちゃもうわ。今まで我慢してたし」

耳まで真っ赤に染めて恥ずかしがる結城がこの世の何より可愛く見えた。

「わり、動く……♡」

ずりゅっ♡ずりゅっ♡ずちゅっ♡ずちゅっ♡  
パン……っ！♡パン……っ！♡パン……っ！♡パン……っ  
！♡

「んおおっ♡あっ♡あぁっ♡あっ♡んぐう♡ゾッ♡オッ♡  
アあ〜っ♡♡♡」

「声イイ♡もっと聞かせろ♡」

ごりゅっ♡ごりゅっ♡ごりゅっ♡ごりゅっ♡ごりゅっ♡ごりゅっ♡  
ごりゅっ♡

ぷっくり腫れたGスポにカリをひっかけて何度も擦る。  
あまりに気持ち良すぎてトぶかと思った。

「オッ！♡オッ！♡オッ！♡♡ごりゅごりゅ♡♡やば♡



♡♡♡♡キちまうッ♡またへんになるう♡♡♡♡♡♡♡♡」  
「いいよイケッ♡たくさんイケッ♡♡♡」

ごりゅうッ！！♡♡♡♡

ビクンッ！！♡♡♡♡ガクッガクッ♡♡♡♡ガクッ♡♡  
♡♡

きゅんっ♡♡♡きゅんっ♡♡♡きゅう〜〜……………んっ♡  
♡♡♡♡♡

「イグう……………〜〜〜ッッ！！♡♡♡♡♡♡♡♡」  
「うっ♡俺もイク♡結城のナカに種付けする♡イクイクイクイク…………ッ！！♡♡♡♡」

どびゆるるるるるっ！！♡♡♡♡  
どぷっ♡どぷっ♡どぷぷっ♡♡♡♡♡♡♡ビュ〜〜〜〜〜  
ッ！♡♡♡♡♡

「ホお〜〜〜〜……………っ♡♡♡精子出てるう…………♡♡♡  
はら、熱いい…………♡♡♡♡」

痙攣するまんこに数回腰を打ち付け、最後の一滴まで絞り出す。

ああ…………やっとな結城に中出しできた♡

今までイライラしてもティッシュに放り出すしかなかった  
精液をまんこに注ぎ込んだ♡

最高だった。もっと、もっとしたい。

俺がどれだけこいつに悩まされてきたか、その年月を考えると一度の射精で釣り合うわけがない。

「！？♡おおみやのちんぽ、なんで出したのにデカくなってるの……っ♡♡」

「足りない……お前とのセックス気持ち良すぎ……♡」

ずちゅっ！♡ずちゅっ！♡ずちゅっ！♡ずちゅっ！♡

ぱんっ♡ぱんっ♡ぱんっ♡ぱんっ♡ぱんっ♡ぱんっ♡ぱんっ♡ぱんっ♡

ぐちゅっ！♡ぐちゅっ！♡ぐちゅっ！♡ぐちゅっ！♡ぐちゅっ！♡ぐちゅっ！♡

「あ〜〜……♡っく……♡♡ふーっ……！♡好き♡好き♡可愛い♡結城っ♡♡♡」

「オッ！？♡おッ！♡おッ！♡お〜〜〜ッ！♡♡はげしい♡♡おれイきやすくなっとうからあっ♡イぐイぐッ♡♡♡」

今気付いたけど、好きとか可愛いって言うとナカすごい締まる。

応え方がほんと可愛すぎる。口癖になるかもしれない。

びくびく♡跳ねる身体に覆いかぶさり、唇を奪った。  
ピストンを続けながら、結城の舌を舌で引っ張り出してね  
ぶる。  
やがてどっちのものかもわからないくらいとろけて唾液が  
2人の顎を伝う。  
結城は俺の……♡俺の結城……っ♡

「んちゅ♡♡おおみや♡♡キスしゅき♡♡♡このままシて  
えっ……♡♡♡♡っんん……！♡♡」  
「ゆうきっ♡♡♡俺も好き♡♡♡んっ……♡ふっ♡んちゅ  
……ッ♡フッ！♡フーッ！♡♡」  
「〜〜〜〜〜ッ！！♡♡♡♡♡♡ッ〜〜♡♡♡♡♡  
♡♡」

どびゅううううううっっ！！♡♡♡♡♡  
びゅぐぐぐっ♡♡♡♡♡♡びゅるるるるーっ♡  
♡♡♡♡  
ぷしっ！♡♡♡ぷしっ！♡♡♡ぷしゃああっ♡♡♡♡♡  
♡♡

上も下も繋がった状態で一緒にイった。  
結城は精液ではなく潮をぷしゃぷしゃ♡吹いている。  
俺たちはどこからどう見ても両思いラブハメをしている。  
まさかこんな日が来るとは思わなかったから幸せで脳がい

っばいだ。

「は……ッ♡♡♡♡は……ッ♡♡♡♡もお♡♡やばい……  
♡♡♡♡♡♡」

はくはくと息切れしている結城の目尻からは涙が溢れている。

頭を撫でて落ち着かせるように優しくキスをした。

俺のモノはまだ硬度を保っている。くそ、キスハメ、キく  
……♡♡

2度も中出しされぐっちゃぐちゃのまんこにちんぽをうず  
めたまま、火照った両のおっぱいを下から持ち上げる。

「あっ♡あぁっ……♡ふうっ……♡んん♡♡」

「やっぱもちもちですげえ……♡この弾力おっぱい……♡」